

古式遼寧式銅剣の地域性とその社会

宮本, 一夫

<https://doi.org/10.15017/1867926>

出版情報 : 史淵. 135, pp.125-160, 1998-03-10. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

古式遼寧式銅劍の地域性とその社会

宮 本 一 夫

一 はじめに

私は昨年の「東北アジアの青銅器文化」という小論で、遼寧式銅劍の地域的な形態差について論じた⁽¹⁾。そこでは地域差の詳しい論証過程を述べる余裕がなかったため、本稿で再論したいと思う。

さて、ここで改めて遼寧式銅劍の研究史を紐解く必要はないと思えるが、昨年来、遼寧式銅劍に関する論考が相次いでいる。これは以下の研究史を反映しているといえよう。基本的に遼寧式銅劍の型式学的検討を確立され遼西起源説を述べられたのは、一九六〇年代の秋山進午の業績である⁽²⁾。その後一九八〇年代になり、型式学的検討から遼東起源説と地域的な遼寧式銅劍の展開を述べられたのは林滢である⁽³⁾。一方、青銅器生産の器種的な組み合わせやその総合性から地域的な展開を述べ、遼寧式銅劍の遼西起源説を支持されたのは斬楓毅である⁽⁴⁾。さらに一九九〇年代には、秋山進午は、現地調査をふまえ遼東の遼寧式銅劍の鑄上がりの悪さなどから宝器的性格を見て取り、遼西起源説を論証しようとした⁽⁵⁾。こうした段階にあつて、昨年度は拙論を含め、五つの論考が相次いで

登場した。拙論を除けば、徐光輝⁽⁶⁾、秋山進午⁽⁷⁾、千葉基次⁽⁸⁾、村上恭通⁽⁹⁾である。このうち秋山進午のものは論旨的には先に発表されたものの繰り返しであるが、徐光輝・千葉基次はともに遼東起源説を述べ、村上恭通は遼西起源説を述べる。徐、千葉はともにこれまでの遼寧式銅劍の型式学的検討だけではなく、銅劍に伴出する土器を以て年代を検討する必要を述べ、土器編年から遼東起源説を支持している。村上は、遼寧式銅劍にみられる劍柄、劍把頭の組み合わせを重視し、その組み合わせがすべてさう遼西の奴魯兒虎山南麓をその起源地とし、その後の地域的な展開を述べる。ここでいえることは昨年度来の研究動向が遼寧式銅劍分布地域内での地域性を重視しようとする研究方向である。私もこの地域の地域区分あるいは地域単位の展開については述べたことがある⁽¹⁰⁾。こうした細かな地域単位で遼寧式銅劍をみていく必要性には同感であり、遼寧式銅劍の初源期から地域性があることは昨年の拙論にも述べたところであるし、徐光輝も同じ必要性を論じている。しかし、徐や千葉が論じている伴出土器の検討あるいはその年代観には私自身異論があり、本稿にて自説を述べてみたい。また、これまであまり議論されていない遼寧式銅劍の使用法の原理からも、形態変遷の原則を論じてみたい。さらに、地域的な展開を論ずるに当たって最も大切な地域での需要のあり方、すなわち各地域での社会的な発展度に注目すべきであると思える。そこで、ここではさらに墓制を加えて論ずることにより、遼寧式銅劍を有する社会の特質を論じ、さらに遼寧式銅劍の意味を再考してみたいと思うのである。

二 地域区分

本稿の基本的な方法的手続きは、土器様式に基づく地域区分を基本として、そこから遼寧式銅劍の地域性やその社会的意味を問うものである。したがって、まずその地域区分から示さねばならない。地域単位すなわち社会単位の地理的範囲は、時間軸を通じて変容するものであるが、系統的な連続性を持つことをかたて示したことがある。⁽¹¹⁾ 遼西・遼東における地域区分はこの原則に基づくものであるが、遼西に関してはより細かな区分が必要であると認識している。

まず、遼東における地域区分は遼河下流域や渾河・太子河流域と遼東半島に分けられる。遼東半島はより厳密に言えば積石塚が分布する遼東半島南端部の旅大地区と支石墓が分布する碧流河や大洋河流域の遼東半島部に分かれる。また、遼河下流域と渾河・太子河流域は遼寧式銅劍出現以前の段階から明確に地域区分できる。遼河下流域は高台山文化の段階から土器組成上、遼西の夏家店下層と一定の關係を持つており、明らかに渾河・太子河流域の遼東とは異なっている。また、墓制上も卓子式支石墓の有無によってこの地域的な区別は明瞭である。⁽¹²⁾ そこで古式遼寧式銅劍を検討する本稿では、遼河下流域を遼西に含めて検討したい。ところで、この遼寧式銅劍成立の段階から石棺墓が渾河・太子河流域に広がり、遼西と類似した墓制に轉換していく。なお、遼東ではさらに輝発河上流域などの遼東内陸部が地域区分として認められるが、ここでは遼寧式銅劍がほとんど出土せず、さらに固有の大石蓋墓を持つことから、本論考では取り上げない。

一方遼西はこれまで一括して地域区分してきたが、さらに地域細分する必要があると考える。斬楓毅は、青銅器の器種構成をもとにシラムレン河流域、寧城一帯、大凌河流域の三地域に区分している。⁽¹³⁾ この地域の青銅器の展開あるいは土器の文化様式から考えれば、魏營子類型と夏家店上層文化が明瞭に地域区分できるであろうし、

これに対応する形で、殷末から西周中期までの青銅彝器が出土する地域とそれ以北の地域に区分できる。ここでは魏營子類型の分布地域である大凌河流域とそれ以北の地域とを区分して検討したい。その結果、矛形のタイプを除く遼寧式銅劍に限ってみれば、結果的に大凌河流域と奴魯爾兎山以北の寧城地区とに分けることができ、斬楓毅と同じ区分の原則となろう。

三 古式遼寧式銅劍の検討

これから分析する遼寧式銅劍はいわゆる古式段階の遼寧式銅劍である。秋山進午のI式銅劍であり、林漣のA式銅劍である。秋山進午の場合、劍身の突起の変化を中心とした分類であるが、それよりも銅劍に伴う劍柄や劍把頭の型式との組み合わせによる劍身の分析に論証の妥当性がある。一方、林漣の分析は劍身そのものの分類である。ここでは劍身の刃長と刃部最大幅との比率に注目し、その比率の変化、すなわち刃部最大幅の縮小に対して刃長が増大する変化方向を、数値的に示している。この劍身の長幅比は翟徳芳も型式変化の变化方向を客観的に示す証拠として用いている⁽¹⁾。これらの数値化された变化方向からは、遼東の遼寧式銅劍が初段階のものであり、起源地として推定され、この後に遼西の遼寧式銅劍が生まれたとする考え方である。いかにもこの形態的発展方向は客観的事実のように思えるが、これは安易な進化的な解釈の可能性もある。何よりも秋山進午が提起した劍柄や劍把頭の型式変化の組み合わせによる分析に対する反論がなされていないことに問題がある⁽²⁾と考えるのである。

本稿ではすでに述べてきたように、まず銅劍が出土した地域から、その地域の銅劍のあり方を認識することをその方法の原点としている。土器型式において明瞭に区分されてきた地域をその基本として、異なつた社会における銅劍の特質を把握することを第一の目的としたのである。まず、遼西と遼東という厳然とした社会観の違

う地域における銅劍の特性は何かという疑問をその発想の原点として銅劍を眺めることにしよう。

先に著した「東北アジアの青銅器文化」では突起の位置に注目し、突起の位置が劍身の中ほどにくるものを遼西系統の特質とし、突起が劍身の前方にくるものを遼東系統の特質と考えた。現実に遼西と遼東の古式銅劍を見比べた場合、形態的には遼東の方が遼西より関の部分の下膨れになる印象をもつ(図1)。同じように遼東の地域的な特性の可能性を徐光輝も指摘しており、旅大地区のものを狭葉形、渾河・太子河流域のものを広葉形として区分できる可能性を示している。⁽¹⁵⁾

ここでは、まずこうした地域的な形態的性質の存在する可能性を、より客観的に示す意味から数値化しながら表すことから始めてみたい。今回、数値属性として、全長、最大幅、劍身長、劍身前方長(鋒から突起までの長さ)、突起幅、鋒長の計測を試みた(図1)。また、資料として使った銅劍の集成は、表1・表2に示してある。この中には、秋山進午が遼寧式銅劍II式としたものも一部含まれるが、ここでは突起が認められるものを古式遼寧式銅劍として扱うことにする。⁽¹⁶⁾

遼寧式銅劍において全長を分類基準として斬楓毅は三〇cm以下を「短型」として遼東の特徴としている⁽¹⁷⁾。これに関しては、林澧から分類基準が曖昧とする批判があるものの、まず出土地点から帰納的に大きさによる地域差が存在するかどうかの検討が必要になると考える。また、劍の大きさは単に長さだけではなく劍身の最大幅との相関を見るべきであろう。全長と劍身最大幅を出土地点による遼西と遼東に区分して示したのが、図2である。遼東と遼西の銅劍における大きさという企画において、明瞭に二群に区分できると考えられる。これは結果的に斬楓毅の全長三〇cm以上が遼西の銅劍とする見解をある種肯定するとともに、全長と最大幅との相関から林澧の批判をかわすことが可能になったと言えよう。さらに遼東内部を細かく見るならば、散布図の左端に固まっているのは清原県大葫蘆溝と門臉の銅劍であり、その他の大半は旅大地区出土のものである。こうしてみてくると遼

東内部でも、旅大地区と渾河流域とは形態的特徴が違う可能性が存在する。これは当然製作現場が違うことを意味しているのである。また、徐光輝の狭葉形と広葉形の区分も、この散布図に現れていると言えよう。

次に銅劍の大きさ以外の特徴から地域差を指摘してみたい。これは先にも述べた劍身における突起の位置である。遼西では突起が劍身の中央近くに位置するのに対し、遼東では突起が劍身の前方に偏っている。これをより客観的に提示するため数値化して示すことにする。劍身の先端から突起までの長さを劍身前方長とし、この劍身

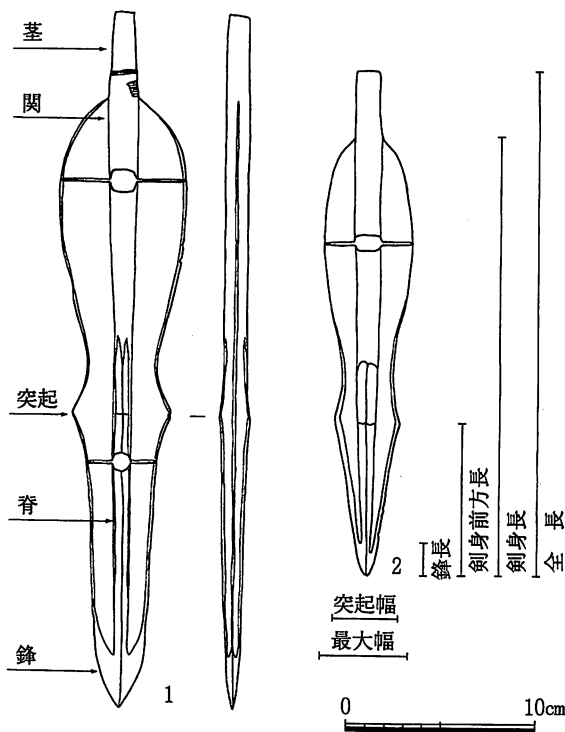


図1 遼寧式銅劍の部位名称
(1: 朝陽十二台営子, 2: 金州亮甲店趙王村)

前方長と劍身長との相関を遼西と遼東とに地域区分して散布図として表したのが図3である。遼西と遼東のまとまりには重なる部分も見られるが、明瞭にグループとしての違いを指摘することができよう。これは表1・2の劍身前方長と劍身長の比率を地域ごとに眺めた場合、両地域が同様な数値を示す場合もあるが、ほぼ〇・四二を境に遼西と遼東が区分できることから、この形態的地域差を証明する一つの証拠となっている。また、この散布図からは、遼西の銅劍には突起長と劍身長との相関が一

表1 遼西の遼寧式銅劍

地 名	全 長	最大幅	劍身長	劍前張	突起幅	鋒 長	比 率	文 献
寧城南山根M101	31.9	5.2	27.9	12.8	4.0	—	0.46	10
寧城小黑石溝	—	4.5	24.6	10.6	3.2	2.4	0.43	35
寧城甸子公社王營子	(34.0)	5.8	(30.5)	(15.0)	4.5	(3.0)	0.49	25
寧城四道營子	29.9	4.1	26.2	12.8	3.6	1.6	0.49	25
寧城甸子公社	30.2	4.55	26.6	12.8	3.4	1.2	0.48	25
寧城沙子北山嘴M7501	29.3	4.7	25.3	10.3	2.8	0.65	0.41	25
寧城孫家溝M7371	35	5.7	30.0	15.1	4.5	2.6	0.50	25
寧城南山根東区石樺墓	—	4.0	21.2	11.0	2.8	1.5	0.52	25
寧城県大名城址付近	32.7	5.7	27.5	12.7	4.5	1.2	0.46	3
寧城採集	(31.4)	5	(27.2)	13.5	—	—	0.50	25
敖漢旗山灣子村	33.6	5.9	29.5	14.9	4.9	2.6	0.51	30
敖漢旗山灣子村	31.6	5.3	27.8	12.4	3.6	4.0	0.45	30
敖漢旗山灣子村	28.0	3.8	24.8	11.5	3.0	—	0.46	30
敖漢旗東井村	32.4	5.0	29.2	14.6	4.0	3.6	0.50	30
喀左興隆庄郷和尚溝M6	31.0	4.1	27.0	13.7	3.8	4.1	0.51	28
喀左興隆庄郷和尚溝M17	26.35	3.8	23.35	11.15	—	—	0.48	28
喀左興隆庄郷和尚溝M13	29.1	4.4	25.0	11.9	—	—	0.48	28
喀左桃花池鉄橋東	35.0	5.5	30.5	15.0	4.3	2.0	0.49	19
凌源採集 (02号)	33.0	5.0	30.0	17.5	4.0	6.0	0.58	19
凌源三道河子	(32.0)	5.5	(27.5)	(15.3)	4.8	(6.5)	0.56	19
建平孤山子公社大拉罕溝M751	35.8	5.8	30.9	15.2	5.0	1.9	0.49	22
建平孤山子公社老窩卜村	30.0	4.8	26.0	11.9	3.6	1.2	0.46	22
建平喀喇沁公社喀喇沁	31.8	4.9	28.0	13.6	4.1	2.1	0.49	22
建平喀喇沁公社喀喇沁	32.0	4.9	28.3	13.6	4.1	2.1	0.48	22
建平採集 (番号朝地博総116)	(32.9)	5.4	(28.5)	(12.9)	4.0	—	0.45	22
建平孤山子郷大拉罕溝M851	27.9	4.5	24.5	10.3	3.7	1.1	0.42	29
建平榆樹林子郷炮手營子M881	30.2	3.8	26.8	11.3	3.5	1.2	0.42	29
建平榆樹林子郷樂家營子M901	35.3	5.9	31.0	15.5	4.7	3.5	0.50	29
北票何家溝M7771	40.2	5.5	36.2	17.7	4.1	5.5	0.49	20
朝陽十二台營子M1	35.6	5.25	30.7	14.4	5.5	2.9	0.47	4
朝陽十二台營子M2	36.8	6.6	32.4	15.5	5.1	2.8	0.48	4
朝陽木頭溝M1	(33.0)	5.2	(28.5)	(13.0)	4.3	(1.3)	0.46	20
朝陽六家子公社東嶺崗	32.3	5.1	27.8	13.6	3.7	1.3	0.49	20
朝陽小波赤村	28.6	3.7	25.0	10.5	2.8	1.3	0.42	33
阜新化石戈公社胡頭溝M2	(26.8)	4.2	(24.3)	(12.4)	3.3	(0.6)	0.51	24
阜新化石戈公社胡頭溝M5	33.0	4.5	28.6	13.8	3.8	1.2	0.48	24
錦西寺児堡	32.7	4.4	28.5	13.9	3.1	2.5	0.49	8
錦西烏錦塘	25.0	4.2	21.0	10.3	3.7	1.3	0.50	5
義県高台子溝旧陵村	27.8	4.5	24.7	10.8	3.4	0.9	0.44	31
義県稍戸營子鎮	30.2	5.0	26.5	12.8	4.0	2.2	0.49	31
瀋陽鄭家窪子第一地点	35.0	5.0	30.9	13.1	4.4	4.1	0.42	7
瀋陽鄭家窪子第二地点	30.0	(4.0)	25.9	10.9	(3.5)	1.5	0.42	7
瀋陽鄭家窪子M6512	35.6	5.5	30.6	15.3	4.7	4.4	0.50	13

* () は一部欠損または不確かな数値を示す

表2 遼東の遼寧式銅劍

地名	全長	最大幅	劍身長	劍前幅	突起幅	鋒長	比率	文献
撫順大甲邦後山	26.0	5.6	22.5	8.7	4.4	1.8	0.39	23
本溪明山区高台子鄉梁家村M1	(28.1)	5.3	(24.1)	(9.3)	3.6	—	0.39	27
清原北三家郷大葫蘆溝	21.9	5.2	18.6	8.7	3.8	0.3	0.47	18
清原土口子郷門臉	21.8	5.2	19.1	8.0	4.2	0.7	0.42	16
遼陽二道河子M1	28.8	6.2	25.2	10.5	4.7	1.0	0.42	14
新金双房M6	26.7	4.5	23.1	6.3	3.0	0.9	0.27	21
大連金州区亮甲店鎮趙王村	(27.5)	6.2	(24.0)	(10.0)	4.2	—	0.42	32
大連金州区亮甲店鎮趙王村	26.6	4.7	23.0	8.2	3.4	1.2	0.36	32
大連甘井子区營城子鎮崗上M6	28.7	5.4	25.2	10.8	4.4	1.3	0.43	9
大連甘井子区營城子鎮崗上M18	29.4	5.2	25.3	12.0	4.5	1.5	0.47	9
大連甘井子区營城子鎮崗上M19	27.2	5.3	23.7	11.5	4.2	1.8	0.49	9
大連甘井子区營城子鎮樓上M3	30.0	5.8	25.7	10.9	3.8	0.3	0.42	6
大連甘井子区營城子鎮樓上M3	28.4	5.7	25.1	10.5	4.0	0.3	0.42	6
大連甘井子区營城子鎮樓上M3	(25.5)	5.5	(21.0)	9.6	4.3	—	0.46	6
大連甘井子区營城子鎮樓上M3	(25.2)	5.0	23.1	12.2	5.0	1.8	0.53	6
大連甘井子区營城子鎮雙砬子	27.0	5.8	23.6	9.1	3.9	1.4	0.39	9
大連甘井子区營城子鎮後牧城駅	27.8	5.0	23.4	11.0	1.7	4.6	0.47	32
大連甘井子区營城子鎮黃咀子	26.2	5.4	22.2	9.6	4.4	0.8	0.43	32
大連旅順口区南山裡劉家疃	31.6	5.7	27.5	13.1	4.8	0.3	0.47	1
大連旅順口区南山裡郭家屯	27.9	5.2	24.4	11.6	4.3	0	0.48	2
大連旅順口区三潤堡鎮蔣家村	26.8	5.7	22.8	11.3	4.8	2.1	0.50	32
大連旅順口区江西鎮半頭窪	(20.8)	5.0	(17.3)	—	—	—	0	32
大連旅順口区江西鎮小潘家村	28.7	(5.0)	24.7	10.5	4.4	2.1	0.42	32

* () は一部欠損または不確かな数値を示す

定の対応をもっていることが散布図における直線的な分布に現れているといえるのである。これはまさしく遼西の銅劍が一定の厳然とした企画から制作されていることを示しているのである。これに対し、遼東のものは、散布図には一定のグループは見られるものの、突起長と劍身長との相関にはまとまりが見られず、企画性の欠如という点を指摘できるのである。まさに製作者の意図という観点から見ても、遼西と遼東では明瞭な差異が認められ、遼西には完成された企画性が存在するのに対し、遼東には組織的な企画性の欠如を指摘できるのである。

こうした両地域での形態的な違いの上に、その他の特徴についてふれてみたい。遼西・遼東共に古式遼寧式銅劍の特徴は、図1に示すように脊の研ぎが突起部で研ぎ分けられ、突起部よりやや下がったところま

で鑄が認められることである。突起部は傷口を広げ殺傷力を増すための機能と考えられることから、脊も突起部の位置が最も高くなっている。そして、これより下端は刃部を研ぐ必要がないため、脊の鑄が認められない

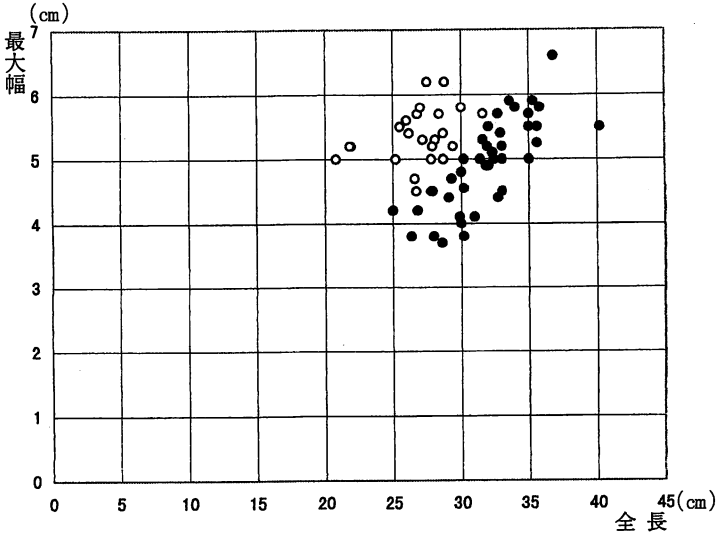


図2 遼寧式銅劍の全長と最大幅の相関 (●：遼西，○：遼東)

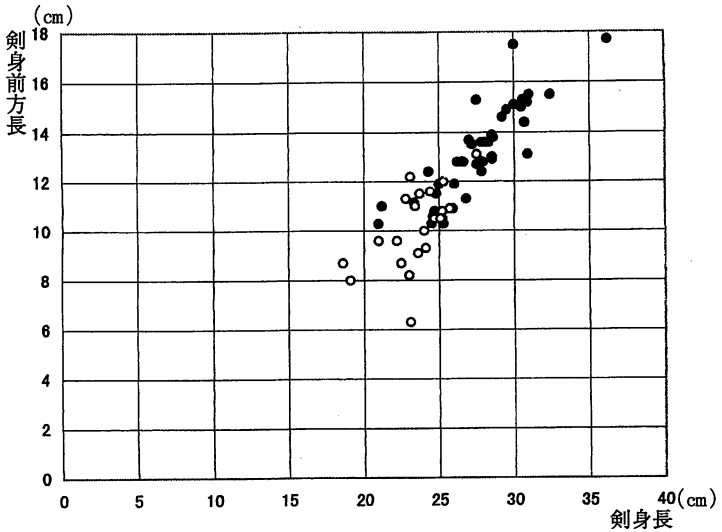


図3 遼寧式銅劍の劍身長と劍身前方長との相関 (●：遼西，○：遼東)

のである。一方、遼寧式銅劍Ⅱ式段階になると、突起部が消失する代わりに、脊での研ぎ分けも見られなくなる。銅劍を深く刺すことに機能的な変化が見られ、刃部下端まで刃部を研ぐため、脊の鑄も劍身下端まで延びている。また、表1・2を比較すれば、鋒長が遼東では相対的に短い場合が多いが、これも地域性として認識しておくべきであろう。遼寧式銅劍Ⅱ式以降鋒長が延びることは、先の原理と同様で如何に銅劍を深く刺そうとする機能変化によるものであるが、この変化は実は遼東を中心になされるものであり、遼寧式銅劍Ⅱ式段階では後で述べるように遼西はほとんど銅劍が存在しなくなるのである。

さて、議論がやや錯綜することになるのであるが、遼西でも和尚溝M六・一三・一七や南山根東区石檉墓の銅劍は、鑄が脊の下端まで延びている事例が認められる。これを例外的な存在と見るかどうかは、銅劍の側面形などの注意深い観察が必要であろう。ただこの場合、突起部での研ぎ分けが認められない可能性があり、鑄型の段階からこの鑄状の稜線が形成されていた可能性もある。矛式銅劍でも古式のものには脊に稜線が走っており、鑄型段階で意識的に作られているものである。そうであるならば、この遼西の脊の稜線という特徴を新しい要素と見るのではなく、古式遼寧式銅劍内においてもより古い伝統と解釈しておきたい。

なお、林漢が「中国東北銅劍再論」で、古式遼寧式銅劍（遼寧式銅劍Ⅰ式）を細分するにあたって、これまでの分類が矛盾をきたす場合があることから、簡単な目安として、関が茎に向かって収束していく形態が、丸く収まるものを古式、角をなしてから直線的に終わるものを新式の特徴としている。¹⁸⁾ 後者はここでいう遼河下流域までを含めた遼西にのみ認められるものであり、前者は遼東・遼西ともに見られるものである。したがって、後者の角をなして直線的に終わる関の形態的特徴は時間差と言うよりは、主に地域的な特徴として認識すべきであろう。

四 古式遼寧式銅劍の年代

これまで、遼寧式銅劍の地域性について述べてきた。ここでは遼西における企画性と遼東における企画性の欠如を指摘することができ、製作段階での組織的なあり方とそうでないあり方という対比は、そのまま地域的な遼寧式銅劍のあり方を反映していよう。秋山進午は、遼東の青銅短劍を實見した結果、撫順大甲邦後山のものは鏃上がつたまままで研ぎを持たないこと、清原県大葫蘆溝は銅質が悪く鑄造技術も拙劣であることを指摘して、実用からほど遠い宝器であると主張している。⁽¹⁹⁾この見解は、上記した地域的な製作工程による組織性と非組織性との対比とに対応している。非組織的な遼東の青銅短劍の生産を、実戦用の武器と言うよりは、所有者の権威を示す威信材として制作されたものであることを示しているといえよう。

これまで、遼寧式銅劍の起源問題に関しては、遼西説と遼東説が対立している。遼東説の場合は、遼寧式銅劍のみの形態変化による進化論的な考え方のみに議論が集中している。これに対し、遼西説は秋山進午の初期論考の段階から銅劍の型式学的変化だけではなく、銅劍に伴う劍柄や把頭飾の型式学的変化との対応を基準としている。さらに斬楓毅は、銅劍のみならずその他の青銅武器、さらに青銅礼器や青銅工具、青銅車馬具の地域的な組み合わせの年代的な違いから、遼西がより青銅器生産が早い段階から出発したことを論じている。⁽²⁰⁾こうした、青銅短劍を単に劍身のみで議論することの危険性から、本来の用途である劍身、劍把、把頭飾の組み合わせから議論しようとしたのが、村上恭通の最新の見解である。⁽²¹⁾それは、これら三者の組み合わせの分布論から、三者の組み合わせが整っている地域をその発祥地とし、その組み合わせが周辺に行くに従い欠落していくことから、遼寧式銅劍の起源地を大遼河流域に求めるものである。同じような見解は郭時中も論証抜きに行っている。⁽²²⁾

こうした青銅器の起源論を考えると、遼東説の根拠として最近提示されている共伴土器の編年に基づく議論

がある。問題は双房六号石蓋石棺墓出土の壺の年代観である。徐光輝はこの壺が尹家村下層一期にあたるとし、それに先立つ双砮子三期文化のC年代をもとに、この壺が紀元前一〇〇世紀に相当すると推定している。²³ もそもC年代からこの時期の細かな相対年代の比較をすることに第一の問題がある。確かに相対的に双砮子三期はほぼ商代後期（殷墟期）に並行するところから、C年代は比較的正確な年代を示している。しかし問題は、これに続く尹家村下層一期が比較的長い年代を示していることにある。¹⁴ すでに筆者がこの間を上馬石A地点下層↓上馬石A地点上層↓上馬石BII地点という細分案を示しているように、²⁴ 尹家村下層一期のどの段階に双房六号石蓋石棺墓の壺が位置するかである。筆者は、地域細分した個々の地域における土器型式ないし層位区分をもとに、この壺を春秋時代併行の上馬石A地点上層と規定している。また、砮頭積石墓の土器細分により、砮頭積石墓の壺から変化して双房六号石蓋石棺墓の壺が出現する過程は、筆者の考え方をその初源として、徐光輝や千葉基次²⁵も同じ考え方を示している。筆者は、砮頭積石墓の新しい段階を上馬石A地点下層に納まると考えるからである。その根拠は、崗上墓下層が、型式学的には双砮子三期より新しい段階のものであり、上馬石A地点下・上層に相当し、この段階まで台付鉢の棒状付紋の伝統が継続することである。これにより、砮頭積石墓の一部は上馬石A地点下層まで年代的に存続することは間違いない。また、双房六号石蓋石棺墓の壺の特徴である盤口の特徴を持つ壺が上馬石A地点下層に存在し、私が壺Ⅲ類としたものである。この壺Ⅲ類は口縁部に文様を有しており、本溪洞穴墓葬中・後期²⁶の鼓頸壺に類似しており、壺Ⅲ類は本溪洞穴墓葬中期と後期の間位置づけられよう。そしてこの壺Ⅲ類の盤口部が変化して、双房六号石蓋石棺墓の壺に系譜的に繋がると考えることができる。したがって、この壺は上馬石A地点上層に相当するのである。なお付言するならば、徐光輝が双砮子二期とする上馬石甕棺は、口縁部の文様から明らかに时期的に下った上馬石A地点下層と位置づけできる。

一方、千葉基次²⁹は、共伴する土器型式から遼寧式銅劍の相対的位置を決めようとするものであるが、遼東に限

つてみれば砮頭の位置づけに筆者とやや意見を異にするところがあるものの、相対的な土器の位置づけはおおむね筆者と同様であることは千葉も述べるところである。ところが、問題の遼西と遼東を比べる際には、朝陽十二台宮子一号石槨と鄭家窪子六五二二号墓の把頭飾の型的な類似性から年代を下げるものである。鄭家窪子は遼河下流域に位置づけられる。遼河下流域は、土器様式として商代並行段階から高台山類型として、遼西との一定の關係性を持っているのに対して、遼東半島部や遼東内陸部とは關係性が認められない地域である。いわば、土器の組成からも認められるように、遼西と交流關係の認められる遼河下流域を遼東に組み込んで議論することに問題がある。千葉が議論したのは遼東半島部での土器型式の変化に照らして遼寧式銅劍の相対的位置を求めたものであり、土器論から遼西と遼東の相対的位置づけを決定されているわけではない点に、問題があるのである。遼東半島部では、これまでこうした土器型式の相対的な位置づけの上に、砮頭積石塚出土の銅鏃、楼上墓の明刀銭などから絶対年代が賦されている。一方、遼河下流域と遼東半島の土器型式はある種の土器を以て一部の土器型式の並行性は求められるものの、墓葬の絶対的な年代観を引き出すほどの精緻なものには至っていない。むしろ、遼西の墓葬に共伴している燕山以南の中原系の青銅彝器や戈や鏃などの青銅武器の年代観からの推定が有効である。

遼西・遼河下流域のこうした中原系青銅彝器から推定できる年代観について、遼寧式銅劍を含む墓葬(表3)を以て、以下に示すことにしたい。寧城小黒石溝が西周後期、寧城南山根M一〇一が西周末〜春秋初期、寧城北山嘴M七〇五一が春秋前期、喀左南洞溝が春秋後期である。したがって、遼西における古式遼寧式銅劍(遼寧式銅劍I式)は西周後期から春秋後期の年代幅で存続しているということが言えよう。遼寧式銅劍II式を副葬している凌源三官甸は、共伴する青銅鼎が戦国前期の特徴を示しており、古式遼寧式銅劍の下限年代を傍証している。

五 遼寧式銅劍の使用法

遼寧式銅劍の起源論を述べる際、村上恭通が遼寧式銅劍を劍身と劍把、把頭飾の三つの部分からなることを強調したが、これら三者が結びついた遼寧式銅劍の使用法に言及した論考はほとんどないように思える。私はこの問題を劍把と劍身との接合の仕方から推定したいと考える。劍把の分類はかつて秋山進午により大きくI式とII式に分けられ、I式が古式の遼寧式銅劍と対応することは今日においても問題はない。このI式劍把と古式遼寧式銅劍が如何に組み合わされて使用されたのか、それを説く鍵は劍把と劍身が同鑄されている同鑄式の内蒙古寧城県小黒石溝石槨墓の資料にある。³⁰⁾

一九九七年春、馬の博物館と東京国立博物館で開催された特別展「大草原の騎馬民族―中国北方の青銅器―」にこの小黒石溝石槨墓の遼寧式銅劍が陳列されており、実見することができた。この墓からは青銅短劍が五つ出土しているが、そのうち三つは矛式青銅短劍であり、他の二つが劍身がいわゆる遼寧式銅劍にあたるものである。この二つの遼寧式銅劍はどちらも劍身と劍把が同鑄された珍しい例である(図4)。このうち一つは、報告によるとさらに柄の端に扁円形の把頭飾(加重器)が加わっており、溶接されているという。もう一つはすでに把頭飾が脱落しなくなっていると報告されている。今回の展覧会で出品されていたのは、この遼寧式銅劍のうち、完全な形の方である(図4-1)。この銅劍を実見して気づくことは、報告文の図面では認められないことであるが、劍身の軸と劍柄のはばき部分との接合関係が必ずしも直角ではなく幾分傾いており、この傾きに平行するように劍柄下端の受け部も幾分傾いていることである。実見できなかったもう一つの遼寧式銅劍(図4-2)も、報告文の図面をこの観点からみれば、劍身に対して劍柄のはばき部分が直角ではなく幾分傾いており、これに平行した状態で劍柄の受け部が対応している。これらの短劍の劍身と劍柄は同鑄であり、決して後の接合によって傾い

たとへは解釈できないものである。初めから意図的に劍身に対して直角ではなく幾分傾けて劍柄を配置しようとする原則があつたと解釈せざるを得ないのである。

こうした観点から、劍身と劍柄が本来別鑄されている遼寧式銅劍を見直してみるならば、この劍身に対する傾きは意外に例があることに驚かされる。別鑄式の場合、先の小黒石溝の例のような検証が難しいが、劍柄の握り部分と劍柄の端部との傾きに注目してみたい。すなわちT字形をしている劍柄の握り部分に対して直角に柄の端部が着いているかどうかを再検討することにより、劍身に対して握りの端部が直角をなしていないことを示して

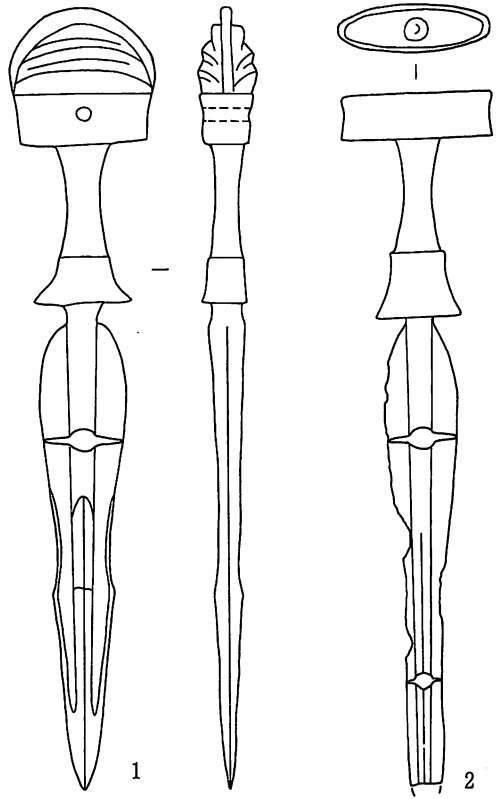


図4 寧城県小黒石溝石槨墓出土銅劍
(報告図面を一部改変，縮尺約1/4)

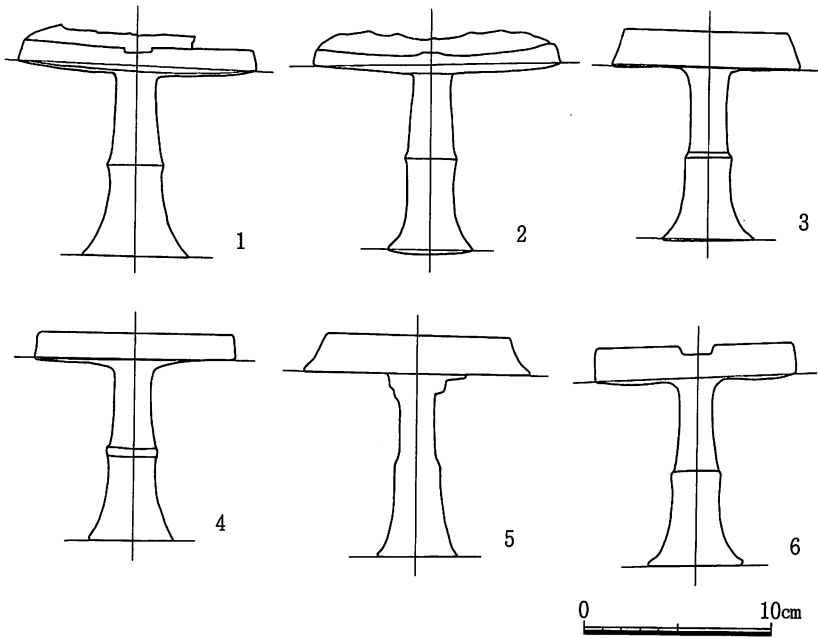


図5 銅柄I式の非対称性 (1: 建平県孤山子房身大垣南山坡, 2: 義県留龍溝郷張家窩鋪村, 3: 北票県三宝何家溝M7771, 4: 凌源県三官甸子何湯溝M7401, 5: 寧城県孫家溝M7371, 6: 凌源県三官甸)

みたいと考えるのである。そこで図5に示すように劍柄の握り部分の垂線とそれに対する直角線を示すことにより、傾きが存在するかどうかを示してみよう。寧城県孫家溝七三七一号墓⁽³²⁾、寧城県王營子⁽³³⁾、寧城県天義付近例⁽³⁴⁾、北票県三宝何家溝七七七一号墓⁽³⁵⁾、義県留龍溝郷張家窩鋪村、建平県孤山子房身大垣南山坡⁽³⁷⁾、建平県二十家子⁽³⁸⁾、凌源県三官甸⁽³⁹⁾などは、劍柄の握り端部が直角ではなく幾分傾いて取り付けられている例である。これはI式劍柄の大部分を示しており、決して鑄造技術の低さ故の非対称性の結果ではないのである。先の小黒石溝の例を含めて考えるならば、この劍身に対する傾きはある目的のために意図的に作られているものと解釈せざるを得ない。では、何のための傾きかということになる。これは小黒石

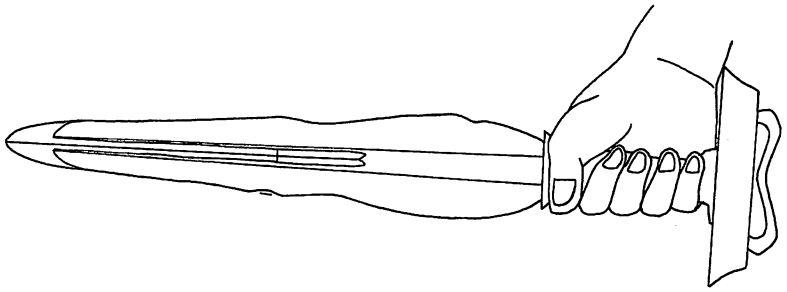


図 6 遼寧式銅劍握柄示意图

溝の同鑄式の銅劍が示すように、劍を握る手の握りの形態に適合する形で劍柄と劍身の接合形態が決定されているという解釈を持つことが可能であろう(図6)。いわば劍を握った状態で最も自然な形での劍身と劍柄の接合形態が生まれたと理解できるのである。そうであるならば、劍身の刃部の上下は必然的に決まっており、刃部は左右対称であるものの、使用時には厳密に上下が決められており、一定の使い方があったと考えられる。この場合、遼寧式銅劍は突き刺すという殺傷道具であるところから、銅劍を握った腕を後方から前方に押し出す形で相手の身体に銅劍を突き刺したものと考えられる。この際、把頭飾は別名加重器とも呼ばれるように、重りであり、銅劍使用時の腕を後方から前方に押し出す際に、把頭飾の重みを加えることにより遠心力による刺突力を増すことができると考えられるのである。さて、劍身の突起部が断面上盛り上がっているように、突起部まで突き刺すことにより傷口を広げ致命傷を与えることができるのである。遠心力による刺突力はこの突起部とも対応しており、銅劍の固定した握り方と刃部の上下位置により、致命的な殺傷力をねらったものと考えられる。このように、遼寧式銅劍は武器としての機

性能を追求された状態で使用され始められたといえよう。そこには、劍身と劍柄、把頭飾がセットとして存在しなければ武器としての機能が十分なり得ないということがいえるのである。劍柄は銅製以外に木製や骨製の可能性が考えられるが、遺存しにくいという特徴から判断すれば、考古資料としては劍身と把頭飾の二点セットと、劍身、劍柄、把頭飾の三点セットは本来同じ機能を有していたと仮定できよう。こうした場合、武器という機能性の観点からして、村上恭通も指摘したように、こうした三点セットや二点セットの分布の中心である遼西とりわけ大凌河流域や寧城地区が、遼寧式銅劍の故地であることに、説得性がでてくるのである。

ところでⅠ式銅柄からⅡ式銅柄の変化は、秋山進午が明らかにしたように、T字形をなす柄の握り末端部が劍身部に対して内湾していくことにある。しかも銅柄の文様が簡素化あるいは素紋化していく傾向にある。この形態変化は明瞭でありわかりやすい変化ではあるが、この変化の意味についてはこれまであまり議論されてはこなかった。先に示したⅠ式銅劍の握りの原理からいえば、この銅柄末端の内湾化は、劍を握る際により握り部の固定化をねらった形態変化であると理解できるのである。この観点からⅡ式銅柄を眺めると、柄の末端が完全には対称形ではなく、かつ柄の上端が対称ではなく一方にやや延びているように見える場合がある(図7)。しかもこの上端の握り部に対する角度と柄端部との角度は平行していない場合が見られる。これは銅柄を握る手の握りの形態に実によく適合するような形態をなしているのである。まさしくこの形態的特徴は、Ⅰ式銅柄あるいは小黒石溝で解釈した、使用時に劍身の刃部の上下が決まっている握り方を、より固定する形態であり、機能的に進化したあり方と解釈できるのである。したがってⅡ式銅柄は、単なる形態的変化だけではなく機能的進化を理解できるのである。いわば技術的革新が存在しているのである。Ⅱ式銅柄にはⅡ式の遼寧式銅劍が組み合わさる場合があり、このⅡ式銅劍の特徴は、脊の鑄が銅劍下端まで延び、かつ突起が消失することにある。これは、より劍を深くまで突き刺すことにより、殺傷を果たす変化である。この場合、重りである把頭飾を伴いながら、腕の後

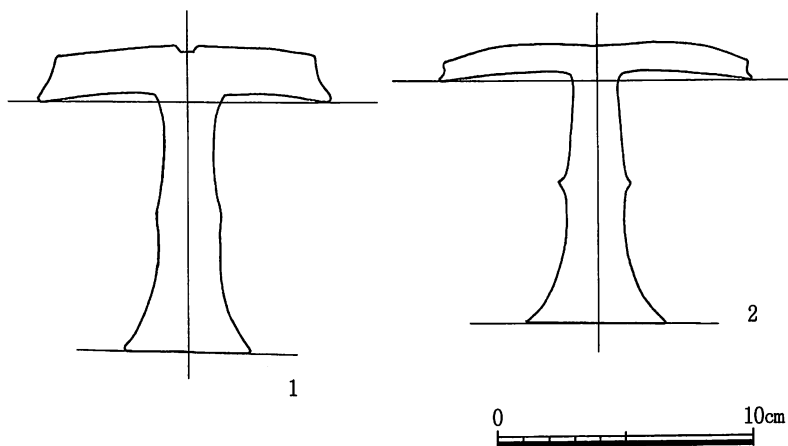


図7 銅柄II式の非対称性(1：海城県大屯，2：北票県大板公社楊樹溝)

方から前方へ突き刺す段階での遠心力的な効果がより期待され、柄の安定的な握りが要求されたと考えられるのである。したがって、II式銅柄の変化は、剣身の変化と共に、より効率的に殺傷力を高める変化であると規定できるのである。

こうしてみた場合、先の銅劍の生産企画による解釈だけではなく、劍身と劍柄との組み合わせが問題になるのである。劍柄には銅柄以外に木質や骨角製などの有機質のものの可能性が考えられるが、これは遺存しないために把頭飾の存在が鍵になる。圧倒的にこれらの組み合わせの分布の中心は大凌河流域であることは村上恭通も指摘しているところであるが、銅柄に限ってみればI式銅柄は大凌河流域を中心とする遼西に限られるが、II式銅柄になって始めて遼東にもその存在が認められる。その例としては、海城県大屯⁽⁴⁰⁾、大連市甘井子区楼上一号墓⁽⁴¹⁾、大連市旅順口区即周墓⁽⁴²⁾、長海県上馬石三号墓⁽⁴³⁾、伝撫順出土京都大学蔵資料⁽⁴⁴⁾、しかも、把頭飾を持つ銅劍は遼東ではごく限られ、その型式も古式遼寧式銅劍(I式)内では、新しい型式である。したがって、実践武器のこの機能的な面からも、遼西にその本来の実践機能があるのに対し、遼東では当初実践機能がなく、実践機能が備わるのはやや型式的に変化した段階、すなわち時間的に遅れた段階に始まっていると

いえよう。こうした武器としての機能面からも、遼東は遼寧式銅劍の開始段階には宝器的な様相が強かったと判断できるのである。

六 墓葬からみた社会構造

次にこうした地域における銅劍の需要の違い、すなわち銅劍を所有する社会のあり方を復元することにしよう。この時期には集落資料がほとんどないところから、階層構造をよく示す墓葬構造から、まず地域復元を試みたい。試みに、遼西では遼寧式銅劍と矛式銅劍が共存する寧城地区、遼寧式銅劍が主として分布する大凌河流域に分ける。高台山文化段階で遼西と共通した土器組成を持つようになった遼河下流域をさらに遼西に含めて考える。

遼東では、遼河下流域とは土器組成を異にするが石槨墓の分布する渾河流域、大石蓋墓の分布する遼東半島、積石塚の分布する金州湾以南の遼東半島南端である。このうち、遼東半島と遼東半島南端の墓制については、別稿で論じたことがあるので、ここでは論じない。⁽⁴⁵⁾

(a) 寧城地区

墓層構造は基本的に堅穴土壙墓であるが、墓層構造は以下の三種類に大きく分類することができる。墓室は石塊を積み上げて石室が構成され、内部に木棺を置く石槨墓。木棺を持たず、石槨状に石塊を組み上げるもので、石槨墓を構成するもの。堅穴土壙内に木棺のみを配置する木棺墓。その他、石槨墓であるが石塊が完全に積み上げられておらず、木棺と墓壙の間に一部石塊が見られるものを変形石槨墓と名づける。また、石槨墓状をなすが、一部にしか石塊が認められず完全な石槨墓を構成していない変形石槨墓に分けることができよう(図8)。また副葬品の構成を青銅礼器、青銅武器、青銅工具、青銅馬具、青銅裝飾具の組み合わせで評価する。これを示したのが表3である。さらに墓壙の大きさを構成要素と見れば、墓層構造において明らかに石槨墓が、副葬品の組み合

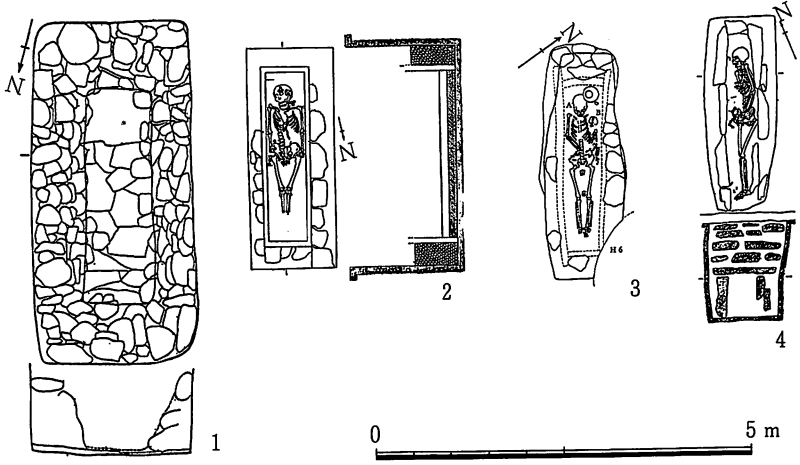


図8 遼西の墓葬分類 (1 石槨墓：南山根M4, 2 変形石槨墓：夏家店M17, 3 変形石槨墓：夏家店M11, 4 石棺墓：南山根M10)

わせから見ても階層構造の比較的高い位置にあることが明瞭である。さらに石槨墓の中でもとりわけ墓壇の大きいものが、副葬品の構成からみても階層上位者であることを示している。石槨墓と変形石槨墓、木棺墓、石棺墓・変形石棺墓は、副葬品の構成から被葬者を階層的に明確に区分できよう。

(b) 大凌河流域

石槨墓、変形石槨墓、石棺墓、木棺墓以外に、木槨墓や土墳墓が加わっている。副葬品や墓壇の大きさからは石槨墓↓変形石槨墓・木槨墓・木棺墓↓石棺墓↓土墳墓の順で階層差が認められる。これは寧城地区の墓葬に見られる階層構造とほぼ同じ傾向が認められている。ところで木槨墓と土墳墓を主体とする墓群は喀左県和尚溝墓地にのみ認められる。和尚溝墓地は二二基の墓が四地点に分かれて認められるが、この内A区は木槨墓のM一の副葬土器の縄縵紋が示すように、夏家店上層の土器とは違い、その前段階である魏管子類型の特徴をなしている。大凌河流域では殷後期から西周前期を中心とする青銅彝器が埋納された穴蔵が複数発見されているが、青銅彝器が副葬された墓葬は、この和尚溝M一のみである。同時期の魏管子墓も木槨構造をなしており、中原的な墓制が

表3 遼西・遼東の墓葬構造

※○は存在を示し、×は無を示す

地域区分	墓葬名	墓塚の大きさ (m)	墓葬構造	木棺の有無	副 葬 品							文献	
					銅礼器	銅剣	武器 (銅剣を除く)	銅鏡	銅車馬具	銅工具	銅裝飾品		
遼西	寧城地区	寧城南山根M101	3.8×2.23	石槨墓	○	○	○	○	○	○	○	○	10
		寧城南山根M102	2.8×1.15	石槨墓	○	×	×	×	×	○	○	○	17
		寧城南山根M1	2.32×0.75	変形石槨墓	×	×	×	×	×	×	○	○	12
		寧城南山根M3	2.42×0.8	石槨墓	○	×	×	×	×	×	○	○	12
		寧城南山根M4	3.52×1.6	石槨墓	○	×	×	×	×	×	○	○	12
		寧城南山根M5	2.25×0.7	石槨墓	○	×	×	×	×	×	×	×	12
		寧城南山根M10	2.15×0.52	石槨墓	×	×	×	×	×	×	×	×	12
		寧城南山根M12	2.3×0.75	変形石槨墓	○	×	×	×	×	×	×	×	12
		寧城県甸子郷小黑石溝	(3.1)×2.3	石槨墓	○	○	○	○	×	○	○	○	35
		寧城県汐子北山嘴M7501	—	石槨墓	?	○	○	○	×	○	×	×	25
		寧城県大城子公社瓦房中M791	—	石槨墓	?	×	○	○	×	×	○	○	25
		寧城県甸子公社小黑石溝M8061	—	石槨墓	?	×	○	○	×	○	×	○	25
		寧城県公里罕公社天巨泉M7301	—	石槨墓	?	×	○	×	×	○	○	○	25
		寧城県梁家营子村M8071	2×0.5	石槨墓	?	×	×	○	×	○	○	○	25
		寧城県孫家溝M7371	—	石槨墓	?	×	○	×	×	○	○	×	25
		赤峰市夏家店M11	2.49×0.91	変形石槨墓	○	×	×	×	×	×	○	○	11
		赤峰市夏家店M12	?×1.1	木槨墓	○	×	×	○	×	×	○	×	11
	赤峰市夏家店M14	2.05×0.87	石槨墓	○	×	×	×	×	×	○	○	11	
	赤峰市夏家店M15	?×0.90	石槨墓	○	×	×	×	×	×	×	○	11	
	赤峰市夏家店M17	2.30×0.93	変形石槨墓	○	×	×	×	×	×	○	○	11	
大凌河流域	建平県孤山子郷大拉罕溝村M851	—	石槨墓	?	×	○	×	○	×	○	○	29	
	建平県樹林市鞏炮手营子村M881	2×0.9	石槨墓	○	×	○	○	○	○	○	○	29	
	建平県樹林市郷梁家营子村M901	2.05×0.64	木槨墓	○	×	○	×	×	×	○	○	29	
	建平県陈碌科鎮水泉M8	1.93×0.76	変形石槨墓	○	×	○	○	×	×	○	○	26	
	喀左県南洞溝	2.9×2	石槨墓?	?	○	○	○	×	○	○	×	15	
	喀左県興隆庄郷和尚溝M6	—	木槨墓	?	×	○	×	×	×	×	×	28	
	喀左県興隆庄郷和尚溝M10	—	変形石槨墓?	○	×	×	×	×	×	○	×	28	

地域区分	墓 葬 名	墓域の大きさ (m)	墓葬構造	木棺の有無	副 葬 品						文 献		
					銅礼器	銅剣	武器 (銅剣を除く)	銅 鏡	銅車馬具	銅工具		銅装飾品	
大凌河流域	喀左県興隆庄郷和尚溝M12	—	木槨墓	?	×	×	×	×	×	○	×	28	
	喀左県興隆庄郷和尚溝M13	—	木槨墓	?	×	○	×	×	×	×	×	28	
	喀左県興隆庄郷和尚溝M15	2.57×0.7	木槨墓	?	×	×	×	×	×	○	×	28	
	喀左県興隆庄郷和尚溝M17	2.15×1.6	木槨墓	?	×	○	×	×	×	○	○	28	
	喀左県興隆庄郷和尚溝M22	—	土槨墓	×	×	×	×	×	×	○	×	28	
	喀左県老爺廟郷里木樹營子	—	?	?	×	○	○	×	×	×	○	34	
	北票県三宝公社何家溝M7771	2.0×0.7	石槨墓	×	×	○	×	×	×	×	×	20	
	朝陽県十二台營子M1	1.8×1	石槨墓	○	×	○	○	○	○	○	○	4	
	朝陽県十二台營子M2	2.3×1	石槨墓	○	×	○	○	○	○	○	×	4	
	朝陽県十二台營子木頭溝M1	2.0×0.6	石槨墓	×	×	○	×	×	×	○	×	20	
	朝陽県小波赤村	2.0×?	石槨墓	(○)	×	○	○	×	×	×	○	33	
	阜新県化石戈公社胡頭溝M2	半壊	石槨墓	○	×	○	×	×	×	×	×	24	
	阜新県化石戈公社胡頭溝M4	—	土槨墓	×	×	×	×	×	×	×	×	24	
	阜新県化石戈公社胡頭溝M5	半壊	木槨墓?	○	×	○	×	×	×	×	○	24	
	錦西県烏金塘	2.2×0.7	?	?	×	○	○	×	○	○	×	5	
	遼河下流域	瀋陽市鄭家窪子M6512	5×4	木槨墓	○	×	○	○	○	○	○	○	13
		瀋陽市鄭家窪子土槨墓	1.75×0.5	土槨墓	×	×	×	×	×	×	×	×	13
遼 東 渾河・太子 河 流 域	遼陽市二道河子M1	2.4×0.58	石槨墓	×	×	○	×	×	×	○	×	14	
	遼陽市二道河子M2	1.9×0.5	石槨墓	×	×	×	×	×	×	×	×	14	
	本溪市明山区高台子郷梁家村M1	—	石槨墓	×	×	○	×	○	×	×	×	27	
	撫順市前甸公社大甲邦	2.3×1.3	石槨墓	×	×	○	×	×	×	×	×	23	
	撫順市大伙房	2×0.8	石槨墓	×	×	×	×	×	○	×	×	8	
	新賓県大四平馬架子	3×?	石槨墓	×	×	○	×	×	×	×	×	23	
	清原県土口子公社門臉	1.85×0.45	石槨墓	×	×	○	×	×	×	○	×	23	
	清原県土口子中学	1.8×0.8	石槨墓	×	×	×	×	×	×	×	×	18	
	清原県灣甸子公社小錯草溝	2×0.6	石槨墓	×	×	×	×	×	×	×	×	18	
	清原県北三家公社李家卜	2.45×0.94	石槨墓	×	×	×	×	×	×	×	×	18	
	清原県北三家公社大蘆溝	—	石槨墓	×	×	○	○	×	×	×	×	18	
	清原県夏家卜公社馬家店	2×0.45	石槨墓	×	×	×	×	×	×	×	×	18	

この時期に採用されていることが理解される。より中原に近い位置にある殷中期併行の北京市平谷県劉家河や西周前期併行の北京市白浮村⁽⁴⁶⁾も木槨構造をしており、木槨墓が燕地域を介しての中原的な文化交流の結果、この地域に持ち込まれた可能性が高い。夏家店下層文化にも木槨墓が認められ、こうした文化交流の結果として定着したものである。この和尚溝A区M一では副葬品としてさらに西周前期と考えられる現地産の青銅甗や青銅壺が出土しており、年代的に確実に魏営子類型の段階の墓である。仮に穴藏などに埋納された青銅甗器を使った人々を、青銅甗器の年代観から魏営子類型の段階の人々と規定するならば、穴藏に埋納された青銅甗器の年代の下限は西周中期である⁽⁴⁹⁾。寧城地区の石槨墓に認められる青銅甗器の年代の上限は、小黒石溝などに認められるように西周後期であり、遼寧式銅劍を持つ段階は、魏営子類型に後続する西周後期以降であることが容易に推定できよう。さらに、和尚溝の墓地群を分析するならば、副葬土器から判断して夏家店上層文化に属する段階の墓群が認められる。これらはB・C・D区であり、かつ副葬品に遼寧式銅劍が認められる。魏営子類型のA区を含めて考えると、この墓地は地理的に混在しているように見えるが、この地域において魏営子類型と夏家店上層文化を年代差として認識するならば、A区とB・C・D区は別の墓地として分離でき、しかもB・C区間の距離が一一〇m、C・D区間の距離が一二五mとほぼ等間隔をなす集団墓と規定できるのである。また、和尚溝B区M六では木槨構造をなすが、壁龕をもち、構造的には夏家店下層文化の墓層構造を有しており、年代的にも古い傾向にあることが推測できよう。したがって、この和尚溝墓地は、この地域における文化の系統性が交代する微妙な時期を反映していると共に、夏家店下層などの古い墓制や魏営子類型に見られる中原的な墓制が次の夏家店上層文化の墓制にも影響を与えているといえよう。

先に遼寧式銅劍の企画性や機能性から、遼寧式銅劍の出自を遼西の大凌河地域・寧城地区に求めたが、これは魏営子類型の領域と考えられる北京市白浮村などに見られる劍身に脊をもつ銅劍や刀子などの技術と、夏家店上

層文化の南下に伴い新たに大凌河地域・寧城地区で開発されたものと考えられる。その意味で、シラムレン河流域の夏家店上層文化あるいはそこに見られる矛式銅劍は、遼寧式銅劍より先行する段階から始まっている可能性が高いと予想できる。こうした見解は朱貴なども肯定しているところである。⁵⁰ また、遼寧式銅劍の出自を考える上では、殷後期から西周前期の河北省青龍抄道溝などのような脊を持つ銅劍で、柄が湾曲しており、銅刀子の形態に似たものがある。この柄の湾曲具合から考えれば、劍身の上下は固定されて使用されたものと判断でき、遼寧式銅劍の劍身位置が固定しているのと同じ発想である。使用法を含め、遼寧式銅劍の出自の一つにこういった種類の銅劍を考えることができよう。

一方、大凌河流域は喀左南洞溝や凌源三官甸など、伴出する青銅彝器から春秋後期から戦国前期までを境に、新たな墓制に転換している。その典型的な例が五道河子墓地群⁵²である。M五が石槨墓をなすが、その他の一〇基の墓は、土壙墓ないし木棺墓あるいは木槨墓をなす。すでに遼寧式銅劍は副葬されず、装身具に北方青銅器文化的な要素を見せるが、青銅武器は中原的な系統のものに代わっており、明らかに燕的な要素が強い段階といえよう。頭位方向もほぼ墓地群が北向きに統一されており、夏家店上層墓の主体である東西方向の墓とは異なった觀念が導入されている。すでに、副葬土器から燕文化の領域化について論じたことがあるが、その領域化は燕昭王段階にこだわることなく早い段階の可能性がある。この五道河子は戦国中期の可能性があり、この段階から、大凌河流域では燕との関係が濃厚になっていったと仮定できるのである。一方で、大凌河流域ではII式以降の遼寧式銅劍の出土は、凌源三官甸⁵⁴、喀左老爺郷や建平採集品などごく少量に限られることが、この実質的燕文化の広がりによる遼寧式銅劍の生産の規制との関係で捉えることができるのである。

(c) 遼河下流域

この地域の墓葬資料は瀋陽鄭家窪子第三地点に限られ、春秋後期～戦国前期という新しい段階の墓層構造のみ

が知られる。六五二二号墓の遼寧式銅劍はI式の新しい段階のものとII式が共存している。

鄭家窪子第三地点では、南区の大型木槨墓群と北区の小型土壙墓群に墓群が分かれ、階層差が立地差に反映する階層構造に至っている。大型墓であるM六五二二は、副葬品が青銅武器、青銅工具、青銅馬具、青銅裝飾品、石製裝飾品、骨角器、土器などからなり、寧城地区・大凌河流域に比べ、青銅礼器を欠くが、その他の主要副葬品がそろっており、首長階層の人物であることを示している。また、墓壙の際には牛骨が見られ、北方民族的な墓葬祭祀がなされた可能性がある。北区の小型墓である土壙墓の副葬品は僅かに骨劍、骨環、壺(土器)に限られるが、牛腿骨も認められ、同様に北方民族的な墓葬祭祀がなされたであろう。しかもこれら墓群は基本的に北方民族的な文化要素を示しており、決して燕化していない段階である。

(d) 渾河・太子河流域

すでに卓子形支石墓と石棺墓との関係について述べたことがあるように、遼河下流域を除く遼東に卓子形支石墓が分布し、その後、渾河・太子河流域には石棺墓が分布するようになる(図9・10)。石棺墓には遼寧式銅劍が副葬される場合があり、遼寧式銅劍段階の墓葬であることが明らかである。表3に示すように、この地域には石槨墓や木槨墓あるいは木棺墓は存在しない。また、石棺墓の構造は石塊を積み上げてさらに蓋石を置くものであり、箱式石棺状を呈するものはほとんどなく、基本構造は遼西のものと同様といえよう。寧城地区や大凌河流域のような遼西の場合、石棺墓の階層的な位置づけは、石槨墓、変形石槨墓、木槨墓、木棺墓より劣るものであり、決して階層上位者の墓層構造ではない。また、これまでの卓子形支石墓の分布圏へ、渾河・太子河流域といった山間部地域に遼寧式銅劍と石棺墓が分布していく様相は、あたかも新しい文化が流域を遡るように拡大していく様を表しているように感じられてならない。決して遼西の人間が侵略している様を表していると解釈するつもりはないが、新しい文化様式の流入の際に、刺激を与えた地域の階層的上位者の墓葬構造をその地域が

で普遍的に見られた変形石棺墓がその祖形として考え得る可能性があるであろう。どちらにしろ、遼西との文化交流の面から理解できると考えられるのである。

七 社会構造と遼寧式銅劍

こうした墓層構造を見ていくと地域単位での社会的発展度の差を認識することができる。表3に示した墓葬の階層分化からみても、寧城地区↓大凌河流域↓遼河下流域↓渾河・太子河流域の順で階層構造の未分化が認められる。したがって、この順で社会的発展度の差が存在している。また、遼寧式銅劍の分布は、こうしたそれぞれの地域における社会的成熟度に応じて、その受け入れ方が異なっていたと言えるのである。しかも、そこに常に燕山以南の燕文化というより発達した社会との関係が見え隠れしていると言えよう。最後にこの過程をまとめることにしたい。

殷後期から西周前半期の大凌河流域は、魏營子類型が燕との関係性の中で地域支配を行っていた。その後、燕の弱体化に伴い、燕との関係性が薄れ、大凌河流域・寧城地区では北方的民族の領域化の中で独自の武器として生産されたのが、西周後半期の遼寧式銅劍であった。遼河下流域はすでに殷後期から西周前期には大凌河流域から、青銅戚・青銅刀子や青銅斧などが流入しており、青銅武器・工具を介しての政治的な関係が存在した可能性があるであろう。同時にこの段階からの青銅器生産の可能性が存在しよう。

しかしこれより以東の遼東はこの段階では孤立しており、卓子形支石墓に特徴をなす共同体組織を維持していた。これが、大凌河流域において北方的文化様式が濃厚になった遼寧式銅劍成立の段階以降、これまでの交流圏であった遼河下流域をさらに越えて渾河・太子河流域を遡る形で遼西との交流が広がっていたと言えよう。そしてこの地域に遼寧式銅劍を威信材とする階層化社会をもたらしていったと言えるのである。遼寧式銅劍そのもの

はこれを越えて遼東半島や朝鮮半島南端まで拡散しているが、その独自生産は形態的特徴から示すことが可能である。⁽⁵⁹⁾このように遼東における青銅器生産は、遼西より遅れて遼寧式銅劍の段階から始まったとすることができよう。しかも銅劍としての機能性や鑄上がりなどの生産技術の点から判断すれば、当初は宝器的な要素が強いものであったといえるのである。しかも企画性が整っていない点は、遼東内の各地点で銅劍生産が行われており、全体的な統制が取られていな事を物語っているのである。いわば遼東内での地域主体（政体）が群立している状況が読みとれる。遼東において武器としての機能面が本格的に備わったのは、戦国前・中期の遼寧式銅劍Ⅱ式の段階からである。この段階は劍柄Ⅱ式の存在などからも武器機能の強化を確認することができる。また、この段階、遼西の大凌河流域では、凌源三官甸、喀左老爺廟や建平採集品以外、遼寧式銅劍Ⅱ式が認められない。この段階は凌源五道河子墓地のように燕的な文化様式が流入している段階である。まさに、こうした燕文化の広がりが遼東をして銅劍の本格的武器化を促したと判断できる。

遼寧式銅劍Ⅲ式は戦国後期に相当するが、この技術的な革新は、燕の遼東郡の設置に見られるような燕の領域化に伴う、周辺地域の軍事的緊張によるものと考えて良いであろう。燕の進出が周辺地域において階層化構造を伴いながら地域的統合化を促進させていったとともに、軍事的な緊張にあわせて武器の独自の改良を加えていったということができるのである。

八 おわりに

本稿は、これまでの安易な進化論的發展予測に頼るのではなく、文化様式を基本にした地域区分をもとに、古式遼寧式銅劍の出土地から、遼寧式銅劍の形態的地域性を読みとろうとしたものである。その際、数値的な属性の相関関係を示すことにより、形態的な地域特性を示すとともに、企画性の有無を示した。生産時の企画化に注

目することにより、企画性の乏しい遼東を、遼西に比べ組織的な生産体系が確立されていない段階として認識し、古式遼寧式銅劍の起源地を大凌河流域・寧城地区を中心とする遼西と規定した。また、銅柄の劍身との着装形態から、使用方法を復元し、銅柄の型式変化の機能的な意味を明らかにした。そして遼寧式銅劍の武器としての機能変化の方向性から、その遼西起源説を補説した。さらに、小地域での墓層構造の分析から、地域単位での社会構造を明らかにするとともに、地域的な社会発展の違いを示し、その上で古式遼寧式銅劍の地域単位での需要の違いを明らかにした。そしてそこに燕山以南の燕文化との関係から歴史的な解釈を加えようとしたのである。最後に、文献記載に見られる部族名の問題について見通しを示すことで終わりとしたい。

この問題については多くの意見があり、定説をみていないが、最近発表された韓嘉谷の見解⁶⁰には啓発されるところが多い。この論文は北京市延慶軍都山墓地群をこれまで文献上の山戎と考えたのに対し、軍都山墓地群を白狄と考え、遼西の夏家店上層文化こそ山戎とするものである。その論拠を詳述する余裕はないが、文献記載によれば、山戎は大凌河流域の孤竹の北に位置し、燕をしばしば攻撃している。これを撃破したのが春秋中期の斉の桓公であり、この段階までの山戎の隆盛が知られよう。これを本稿で述べた遼西の社会構造に照らせば、寧城地区を中心とする遼西の社会的発展度はこの歴史記述に対応するものであり、かつ階層上位者にみられる中原系の青銅器は、燕山以南の地域との交流や略奪品の可能性を示している。また何よりも興味深いのは春秋以降山戎の記載はなくなり、代わって戦国時代には東胡という部族名が文献記述に現れる。この現象は未だ明確な解釈はないが、本稿で展開した歴史的解釈を用いれば以外と簡単に理解できるものと思われる。それは大凌河流域が戦国前中期段階には燕の影響を既に受けており、すなわち燕化しており、燕にとって軍事的な脅威となっていない点である。むしろこの段階には、遼東を中心として遼寧式銅劍が独自の武器化を果たしている。すなわち遼寧式銅劍Ⅱ式以降の遼東の独自の展開であり、この軍事的な緊張は対燕との関係で捉えられる。したがって、燕山以南

の燕からみた場合、対抗する相手は遼河下流域や遼東地域であったといえよう。東胡とはこういう人たちのことを指すのではなからうか。したがって、戦国後期の燕の昭王代には東胡を撃つて太子河流域の遼陽までを郡治とする燕の拡大がみられるのである。さて、既に予定の紙面がつきてしまった。この先秦期の燕と遼西・遼東との社会的関係については、別稿にて論証せざるを得ない。

本稿はここ数年來暖めてきた内容であったが、時間の関係でまとめられないままであった。ハーヴ・アード・エンチン研究所に訪問学者として研究する段階になって、やっとでまとめることができたのは幸いであった。ハーヴ・アード大学にあつては基本文献は入手できるのであるが、いささか込み入ったものは入手できないことがあつた。それを補つてくれたのが九州大学大学院生の濱名弘二君である。記して感謝したい。また、現地調査にあつては、遼寧省文物考古研究所との共同研究、また内蒙古文物考古研究所との共同研究が大いに参考となつた。これらの共同研究にお誘いいただいた秋山進午先生に深甚の謝意を申し上げたい。さらに「文明のクロスロード・ふくおか」地域文化フォーラム派遣による一九九六年春の遼東での現地調査は、本稿を生む上で有益な資料を提供した。さらに東京国立博物館での遺物の観察に関しては、高浜秀さんと谷豊信さんにお世話になつた。これらの現地調査に際してご協力いただいた諸先生、諸氏はあまりにも多いため芳名の記載を省くが、この場を借りて心より感謝申し上げたい。

(一九九七年十一月十日稿了)

【註】

- (1) 宮本一夫「東北アジアの青銅器文化」『福岡からアジアへ』四(弥生文化の二つの道) 一九九六年
(2) 秋山進午「中国東北方の初期金属器文化の様相(上)(中)(下)」『考古学雑誌』第五三巻第四号、第五四巻第一号・第四号、

一九六八・一九六九年

- (3) 林漢「中国東北系銅劍初論」『考古学報』一九八〇年第二期
- (4) 靳楓毅「論中国東北地区含曲刃青銅短劍的文化遺存」『考古学報』一九八二年第四期・一九八三年第一期
- (5) 秋山進午「遼寧省東部地域の青銅器再論」『東北アジアの考古学研究』一九九五年
- (6) 徐光輝「遼寧式銅劍の起源について」『史観』第一三五冊 一九九六年
- (7) 秋山進午「東北アジア初期青銅器をめぐる幾つかの問題」『朝鮮学報』第一六二輯 一九九七年
- (8) 千葉基次「古式遼寧式銅劍—遼東青銅器文化考・二—」『生産の考古学』一九九七年
- (9) 村上恭通「遼寧式(東北系)銅劍の生成と変容」『先史学・考古学論究II 熊本大学文学部考古学研究室創設二五周年記念論文集』一九九七年
- (10) 宮本一夫「環渤海にみられる考古学的共通性と地域文化」『中国の方言と地域文化(四)』一九九六年
- (11) 前掲註一〇文献
- (12) 宮本一夫「中国東北地方の支石墓」『東アジアにおける支石墓の総合的研究』(平成六年)八年度科学研究費補助金(基盤研究(A)(二)) 一九九七年
- (13) 靳楓毅「夏家店上層文化及其族属問題的探討」『北京市文物研究所論集(二)』一九九一年
- (14) 翟德芳「中国北方地区青銅短劍分群研究」『考古学報』一九八八年第三期
- (15) 前掲註六文献
- (16) 突起がありながらここで古式遼寧式銅劍に含めていないものがある。大連旅順口区南山裡老鉄山西北麓出土のものである(文献二—第四図十・十一)。これは鋳上がったままの状態では正確な計測値を求められないと判断したからである。
- (17) 前掲註四文献
- (18) 林漢「中国東北系銅劍再論」『考古学文化論集(四)』一九九七年
- (19) 前掲註五文献
- (20) 前掲註四文献
- (21) 前掲註九文献

- (22) 郭治中(宮本一夫訳)「内蒙古東南部地区における近年の考古学上の発見と研究」『九州考古学』第七一号 一九九六年
- (23) 徐光輝「旅大地区新石器時代晚期至青銅器時代文化遺存分期」『考古学文化論集(四)』一九九七年
- (24) 宮本一夫「遼東半島周代併行土器の交遷―上馬石貝塚A・BⅡ区を中心に―」『考古学雑誌』第七六卷第四号 一九九一年
- (25) 宮本一夫「中国東北地方における先史土器の編年と地域性」『史林』六八卷二号 一九八五年
- (26) 前掲註三三文献
- (27) 千葉基次「遼東半島積石墓」『青山考古』第六号 一九八八年
- (28) 遼寧省文物考古研究所・本溪市博物館「馬城子―太子河上游洞穴遺存」 一九九四年
- (29) 前掲註八文献
- (30) 項春松・李義「寧城小黒石溝石櫛墓調査清理報告」『文物』一九九五年第五期
- (31) 馬の博物館「大草原の騎馬民族―中国北方の青銅器―」一九九七年
- (32) 寧城県文化館・中国社会科学院研究生院考古系東北考古專業「寧城県新發現的夏家店上層文化墓葬及其相關遺物的研究」『文物資料叢刊』九 一九八五年
- (33) 前掲註三三文献
- (34) 前掲註三三文献
- (35) 靳楓毅「朝陽地区發現的劍柄端加重器及相關遺物」『考古』一九八三年第二期
- (36) 義原文物管理所「義原出土青銅器」『遼海文物學刊』一九九三年第一期
- (37) 建平県文化館・朝陽地区博物館「遼寧建平県の青銅時代墓葬及相關遺物」『考古』一九八三年第八期
- (38) 前掲註三七文献
- (39) 遼寧省博物館「遼寧凌源三官甸青銅短劍墓」『考古』一九八五年第二期
- (40) 孫守道・徐秉琨「遼寧寺兒堡等地青銅短劍与大伙房石棺墓」『考古』一九六四年第六期
- (41) 旅順博物館「旅順口区後牧城駅戰国墓清理」『考古』一九六〇年第八期
- (42) 東亜考古学会「牧羊城―南滿州老鉄山麓漢及漢以前遺跡―」(『東亜考古学叢刊』第二冊) 一九三二年
- (43) 旅順博物館・遼寧省博物館「遼寧長海県上馬石青銅時代墓葬」『考古』一九八二年第六期

- (44) 京都大学文学部「京都大学文学部博物館考古学資料目録第三部中国」一九六三年 考古学資料番号三五一八
- (45) 宮本一夫「遼寧省大連市金州区王山頭積石塚考古測量調査」『東北アジアの考古学研究』一九九六年
- (46) 遼寧省博物館文物工作隊「遼寧朝陽縣魏營子西周墓和古遺址」『考古』一九七七年第五期
- (47) 北京市文物管理处「北京市平谷縣劉家河發現商代墓葬」『文物』一九七七年第十一期
- (48) 北京市文物管理处「北京地区的又一重要考古收穫——昌平白浮西周木槨墓的新啓示」『考古』一九七六年第四期
- (49) 廣川守「大遼河流域の殷周青銅器」『東北アジアの考古学研究』一九九六年
- (50) 朱貴「試論曲刃青銅短劍的淵源」『遼海文物學刊』一九八七年第二期
- (51) 河北省文化局文物工作隊「河北青龍抄道溝發現的一批青銅器」『考古』一九六二年第一二期
- (52) 遼寧省文物考古研究所「遼寧凌源縣五道河子戰國墓發掘簡報」『文物』一九八九年第二期
- (53) 宮本一夫「戰國時代燕國副葬陶器考」『愛媛大学人文学会創立二十五周年記念論集』一九九一年
- (54) 前掲三九文獻
- (55) 劉大志・柴貴民「喀左老爺廟鄉青銅短劍墓」『遼海文物學刊』一九九三年第二期
- (56) 建平縣文化館・朝陽地區博物館「遼寧建平縣的青銅時代墓葬及相關遺物」『考古』一九八三年第八期 図一〇—三
- (57) 前掲註一—二文獻
- (58) 前掲註一—二文獻
- (59) 前掲註一文獻
- (60) 韓嘉谷「從軍都山東周墓談山戎、胡、東胡的考古学文化帰属」『内蒙古文物考古文集』一九九六年

文 献

- 1 東亜考古学会「牧羊城—南滿州老鉄山麓漢及漢以前遺跡—」(『東亜考古学叢刊』第二冊) 一九三二年
- 2 森脩「南滿州発見の漢代青銅器遺物」『考古学』第八卷第七号 一九三七年
- 3 島田貞彦「滿州国新出の古銀銅面及二三の青銅遺物について」『考古学雜誌』二八卷二号 一九三八年
- 4 朱貴「遼寧朝陽十二台營子青銅短劍墓」『考古学報』一九六〇年第一期

- 5 錦州市博物館「遼寧錦西烏金塘東周墓調查記」『考古』一九六〇年第五期
- 6 旅順博物館「旅順口区後牧城駅戦国墓清理」『考古』一九六〇年第八期
- 7 瀋陽市文物工作組「瀋陽地区出土青銅短劍資料」『考古』一九六四年第一期
- 8 孫守道・徐秉琨「遼寧寺兒堡等地青銅短劍与大伙房石棺墓」『考古』一九六四年第六期
- 9 朝中共同発掘隊「中国東北地方の遺跡発掘報告」一九六六年（東北アジア考古学研究会訳「崗上・楼上」一九六三・一九六五
中国東北遺跡発掘報告）一九八六年
- 10 中国科学院考古研究所東北工作隊・遼寧昭烏達盟文物工作站「寧城南山根石槨墓」『考古学報』一九七三年第二期
- 11 中国科学院考古研究所内蒙古発掘隊「赤峰药王廟、夏家店遺址試掘報告」『考古学報』一九七四年第一期
- 12 中国科学院考古研究所内蒙古工作隊「寧城南山根遺址発掘報告」『考古学報』一九七五年第一期
- 13 瀋陽故宮博物館・瀋陽市文物管理弁公室「瀋陽鄭家窪子の兩座青銅時代墓葬」『考古学報』一九七五年第一期
- 14 遼陽文物管理所「遼陽二道河子石棺墓」『考古』一九七七年第五期
- 15 遼寧省博物館・朝陽地区博物館「遼寧喀左南洞溝石槨墓」『考古』一九七七年第六期
- 16 清原県文化局「遼寧清原門臉石棺墓」『考古』一九八一年第二期
- 17 中国社会科学院考古研究所東北工作隊「内蒙古寧城県南山根一〇二号石槨墓」『考古』一九八一年第四期
- 18 清原県文化局・撫順市博物館「遼寧省清原県近年発現一批石棺墓」『考古』一九八二年第二期
- 19 新楓毅「論中国東北地区含曲刃青銅短劍的文化遺存（上）」『考古学報』一九八二年第四期
- 20 新楓毅「朝陽地区発現の劍柄端加重器及相關遺物」『考古』一九八三年第二期
- 21 許明綱・許玉林「遼寧新金泉双房石蓋石棺墓」『考古』一九八三年第四期
- 22 建平県文化局・朝陽地区博物館「遼寧建平県の青銅時代墓葬及相關遺物」『考古』一九八三年第八期
- 23 撫順市博物館「撫順地区早晚兩類青銅文化遺存」『文物』一九八三年第九期
- 24 方殿春・劉葆華「遼寧阜新胡頭溝紅山文化玉器墓的発現」『文物』一九八四年第六期
- 25 寧城県文化局・中国社会科学院研究生院考古系東北考古專業「寧城県新発現的夏家店上層文化墓葬及其相關遺物的研究」『文物資
料叢刊』九 一九八五年

- 26 遼寧省博物館・朝陽市博物館「建平水泉遺址発掘簡報」『遼海文物学刊』一九八六年第二期
- 27 魏海波「遼寧本溪発現青銅短劍墓」『考古』一九八七年第二期
- 28 遼寧省文物考古研究所・喀左県博物館「喀左和尚溝墓地」『遼海文物学刊』一九八九年第二期
- 29 李殿福「建平孤山子、榆樹林子青銅時代墓葬」『遼海文物学刊』一九九一年第二期
- 30 邵国田「内蒙古敖漢旗発現的青銅器及有关遺物」『北方文物』一九九三年第一期
- 31 義県文物管理所「義県出土青銅短劍」『遼海文物学刊』一九九三年第一期
- 32 許明綱「大連市近年来発現青銅短劍及相關的新資料」『遼海文物学刊』一九九三年第一期
- 33 張静・田子義・李道升「朝陽小波赤青銅短劍墓」『遼海文物学刊』一九九三年第二期
- 34 劉大志・柴貴民「喀左老爺廟郷青銅短劍墓」『遼海文物学刊』一九九三年第二期
- 35 項春松・李義「寧城小黒石溝石槨墓調査清理報告」『文物』一九九五年第五期